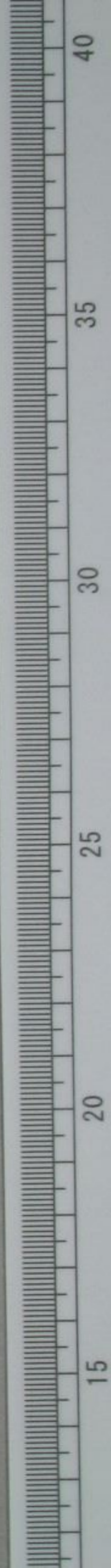


坂行者御傳記函巻

下

~~6
131
3~~

逍遙文庫
文庫 6
188
3



役行者御傳記圖會卷之下

浪華 藤東海著



金峯山本尊出現之話

並行者山上ヶ嶽御登山前鬼後鬼之話

大和國吉野郡金峯山一名金ヶ嶽御嶽と云ふ黃金山なるよりの名はくまの
 ぐし山と八郡の谷よりのり。或説ふ天竺より飛來の峯ともいへり。常々金と乳立て
 三國無雙の靈山なり。役行者ハ義賢義女を驅して。鳴川山を下り。六田の郷よ
 行吉の川を渡りて。荊棘を踏分登る事三十餘丁なり。爰み止り。山神金精大明
 神神明帳に金峯神社吉野山の地之主なり。とてあり。次ハ本尊の出現を祈りまつ。般若心經を誦して
 一七日及べり。尔時地藏菩薩出現。抑此菩薩地徳をたまへ。萬物ハ慈悲深
 く二佛の中をいつのり。一切の衆生を化度し。至然れども。其相原轉よし。未世強剛の

役行者御傳記圖會卷之下

行者の御高徳をまてゝあて此所より千日の行をなす玉へ八辨天女出現したる

衆生を化度せん難しとて魚の谷へ抛玉。後世川上の莊神の谷村に二宇の宮と
建立し地藏菩薩を本尊とす。妹香山金剛寺と号す。是をよ一の地
地藏と云傳ふ。行者又心經を誦し玉とて。三七日子して。弥勒菩薩出現し玉とて。是
も心経とて擲さるる。是より千日の御修行ありし
藏王權現出現し玉。其相青黒忿怒よりして。左の手に劔印を結び腰をかき右の
手に三股杵を執り。巖窟より出昔靈山小在く妙法を説。今金山山小金剛
藏王の身を現すと直小虚空を踏く。山とて嶽の方へ飛去り玉。行者八是と并し
昂尊像を等身小作りて本尊とす玉。仏量二丈六尺なり。次小十五童子出現
して。行者を守護し玉。經護童子。福集童子。常行童子。集飯童子。宿
善童子。禪前童子。羅細童子。檢増童子。後世童子。虚空童子。劔光童
子。惡除童子。香積童子。慈悲童子。除魔童子。以上十九童子より。經護童

子より。羅細童子まで七童子と。金剛山小置八童子と。後小山上嶽小置王。又
本尊の脇に六左小觀立音菩薩。又右小彌勒菩薩。又をそへ玉。後小行者
の尊像と安置し。堂塔僧舎を建立し。扱役行者。天の川より玉。紫上
ハ山上嶽よりして。洞川の北を流す。十津川より入る。清水なり。此所よりあて。千日之
間御修行ありて。大峯の嶮路を開くを。初玉。或時岩中。琵琶の響微妙ふ
聞へらバ琵琶山と号す。後小一寺を建立し。白飯寺と云。又弘法大師八役
行者の御高徳をまてゝあて。此所より千日の行をなす玉へ八辨天女出現したる
大師自天女の尊像を彫刻して安置し玉。後世小至く。十二村の氏神と崇奉り
天の川。賊天是なり。行者八是より。山上嶽へおもむきたり。柞山上嶽ハ吉の山
あり。南方よりて。山路峻阻なり。行者八錫杖とて。道と踏分け。小天井。大天井
を大鞞搥と云へり。所より玉。時子岩空屋あり。大斧を持たる。二鬼踊り。生前後

史行記御事已聞

より。道を妨ぐ曰何用有と。爰末のやと怒まる客貌ハ尋常の人より何れ
 丈高く。両眼光り有と身小黄衣を着たり。行者曰是妨をなすハ如何
 かる者ぞや。二鬼答之我ハ此山に任んて人肉を食ふるを好めり。汝此谷下よ命を
 捨我腹を肥せよと。前後より擲でかん。行者ハ錫杖をうけんと。父行をうもせ
 と。匪を捕て足下踏しき。汝等を生置。後世まて登山の妨なり。ち
 殺べき者ものれども。今よの心を改免。我兇小随。助べ」と曰ハ二鬼とも声
 を發し。ヤへきるより。須更男一玉と云。行者ハ二鬼を男一玉ハ志願ふこと
 何れ。中へ。其意よめり。免さんと有り。ハ二鬼苦ら。き声をして。願ひ
 り。ハ我々麓の里に住めり。者なる。撞々の惡業重りて。里小住ゆ。かなつ
 ぞ。山に隠れ。獸を食ひ。命をばなぐ。今一命を助け玉。行者を守護
 永く靈場の守とならん。後世まて。修驗道を妨る者。何れ。ハ斧をと。頭を

徴塵ミチじんふ女にさんとへり。行者此誓言ちかひげんよよい。二鬼の罪を免し。命を助け。前後子
 志しく。入玉。依之前鬼。後鬼の名。此者里に住。時八人の男子。有り。ま。愛を
 り。他たふ異ことなり。然しかり。或時。嫡男病ちやくなんびやうふ。卧り。而親心を痛め。必抱かならして。有り。り。う
 廿日にじふにち餘り。よ。て終つひに死したり。而親おや歎なげき。かな。む。り。限かぎり。な。然しかり。よ。二男
 も。ま。病びやうふ。かり。十日餘り。よ。て死したり。それより。半羊はんやうと。の。り。七男しちなんまで死
 當歳たうざいの男子なんし二人の。殘のこり。是より。後ハ朝暮あさゆふ子の。愛あひ。農業のうぎやうふ。し。出でる。在あり。り
 が。ま。此小兒こごも。病びやうふ。觸ふく。乳房ちちぶを。含かり。よ。一口ひとくちだ。も。香事かうじを。と。不得えらず。而親おやハ胸むねを。裂き
 膏かおと。剥はく。の。思おもひ。を。な。し。神佛かみぶつに。祈いのちり。我命わがいのちよ。か。へ。ん。の。を。願ねがふ。と。虽いさ。ら。に。其驗そのしるしも
 なく。終つひに。七日しちにちふ。て。死したり。依よ之。泣なき。け。み。声こゑハ。一村いっぺんの中なかに。聞きへ。甚いたく。哀あはれ。ま。なる。有り。り。さ
 ほ。ま。れ。バ。里さとへ。り。ち。よ。り。て。葬むすぶ或あるは。行人あきんどと。云いふ。死し骸かゝを。い。づ。き。く。さ。ら。に。を。な。さ。さ。む。老
 人の。曰いく。死した。ら。骸かゝを。忘わすれ。一田いっでん置おか。却かへて。魂たま白鬼はくきの。迷まよひ。と。なる。へ。速はやく。葬むすぶり。て

其雲を吊ひ玉ひのこ。殷勤よ教へんども。耳もかきむ。後よハ。毛服たちて
 怒り白刃り。是く愛しき子を捨よ。哀れをまらぬ鬼ども。哉とさ。と人を
 追半一をさ。一。望め夫婦うち奇敷き居。終に我子の死骸を食盡
 する。是より狂人となり。唯他人の子の健りたるを見く。妬ま。思ひ
 て鬼畜の心よとなり。然り。隣家よ富歳の女子ありて。父母離愛。とら
 る。浅か。ど。養育せ。を見く。悪まる。思ひ積りて。終に其小兒を取食
 ひり。是より山小隠れ獸肉を食。一年経。幽谷入り。鬼神の如く
 よよりて。正行の者を悪。既小役行者を妨んと。其戒を請。積り悪業を。懺
 悔して善心を生。永く山上ヶ嶽の行場を守り。參詣の人々を懲。善
 小尊く事。偏小行者の御威徳なり。其住。里を前鬼の里と。後世
 に至り。本山當山何ま。峯入の節。此里よ宿。玉。又曰播。后鬼

村。日光山。善鬼といへ。修験者。是ハ別傳。著。見く。知るべ
 ぬ。前鬼。後鬼。ハ斧を持。先。山上ヶ嶽。登り。行者ハ。義賞。義。を志
 ぐ。峻路を踏分。高。十丈。小聳。た。岩。後世。鐘懸。岩。此
 所。是より。西の。臨。岩。を。魏々たる。所。小草庵。を。蔵王。権現
 の尊像。を安置。一。後小行者の御遺像。を副奉。是より。西。偏土
 岩。と。名。東北。小。を。蟻の門。渡り。と。号。飛石。東の。臨。岩。行。道。岩
 屏風。岩。等。是より。山上ヶ嶽。至。其山。勢。高峻。山頂。小。淨。殺。を。營。く
 蔵王。権現。を。安置。一。夫より。稲村。ヶ嶽。小。篠。普賢。ヶ嶽。兒。宿。是より。層。巒。疊
 嶂。と。山路。峻。攀。躋。御。嶽。神山。小。至。又。南方。小。大。日。ヶ嶽。向。次。小。轉
 法輪。ヶ嶽。天。狗。ヶ嶽。地。蔵。ヶ嶽。東。屋。ヶ嶽。種。ヶ嶽。仙。ヶ嶽。笠。捨。山。花。折。山。土。室。岳
 王。置。権。現。至。吉。野。山。の。山上ヶ嶽。至。九。六。里。餘。又。山上ヶ嶽。より。御。嶽。神山

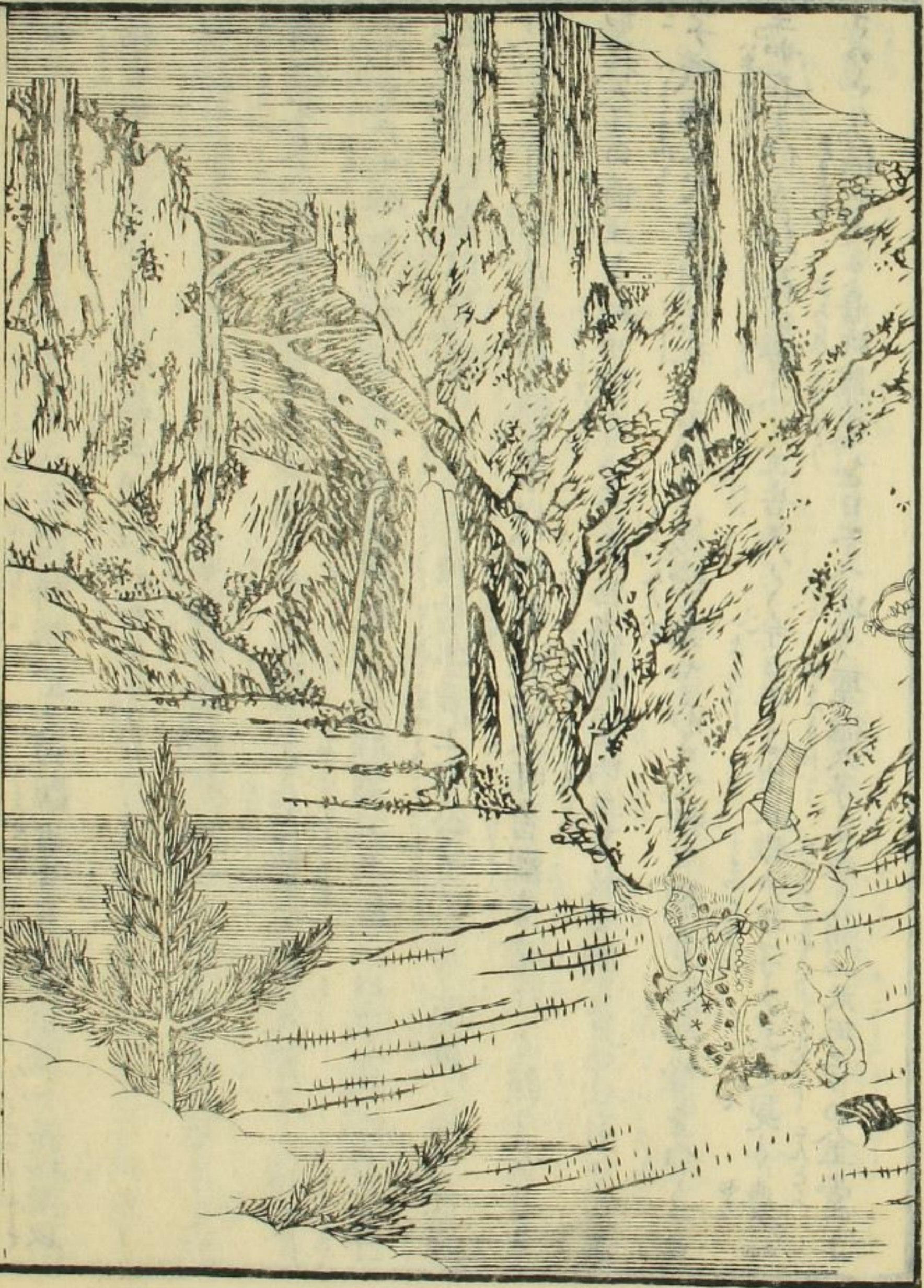
まぐ九六里餘。御嶽神山より玉置近九十里餘あり。都て是と峯中とし
 是の如く峻難の山路を踏分後世までの行場を開き玉。又御嶽神山に登り
 時一躰の骸骨あり。其丈九尺五寸許りあり。左の手に獨股杵と執り右の
 手に利劔と執り仰ぐ母セリ。行者獨股杵と劔とをととんと一歩ふ六動
 けども取得のついでに大に怪しむ。此山頂より上りて。本尊より祈り玉へ夢
 中より告るく。汝七生の前より當り修行せり。才三生まで。岩窟を開き。則
 三重の岩窟あり。今見り骸骨ハ才三生の古骨。劔杵を得んと思ふ。千の陀
 羅尼を誦し。取らべしとあり。夢さるる後教の如く千の陀羅尼を誦し
 する。一千遍ふ。劔杵を得玉。劔ハ八角より長九尺あり。則降魔
 の利劔と号し。是を持し玉。劔を帯し。君子仕へ玉。武士と云。利劔を
 帯し。山に在り。本尊藏王権現を守り仕方故。山武士の名あり。故因。曰

野武士野依りなど相似たるとも甚異あり。野武士野依りハ山賊の類ひし。と
 野依り武士あり。まぐ山は伏ふと書し。一理ありとも。山武士と書すと本意ありむ
 然まども是ハ予が愚按なり。水み。が。猶博識のふはわくあり。一
 行者ハ此利劔を義賞し傳ふ。義賞ハ義女ハ傳ふ。義女ハ義真ハ傳ふ。義真
 ハ壽元ハ傳ふ。壽元ハ傳ふ。依る。金峯山藏王堂の秘所。後
 世よりて。い。修験道ハ劔を帯する。此古例よ
 りのせなり

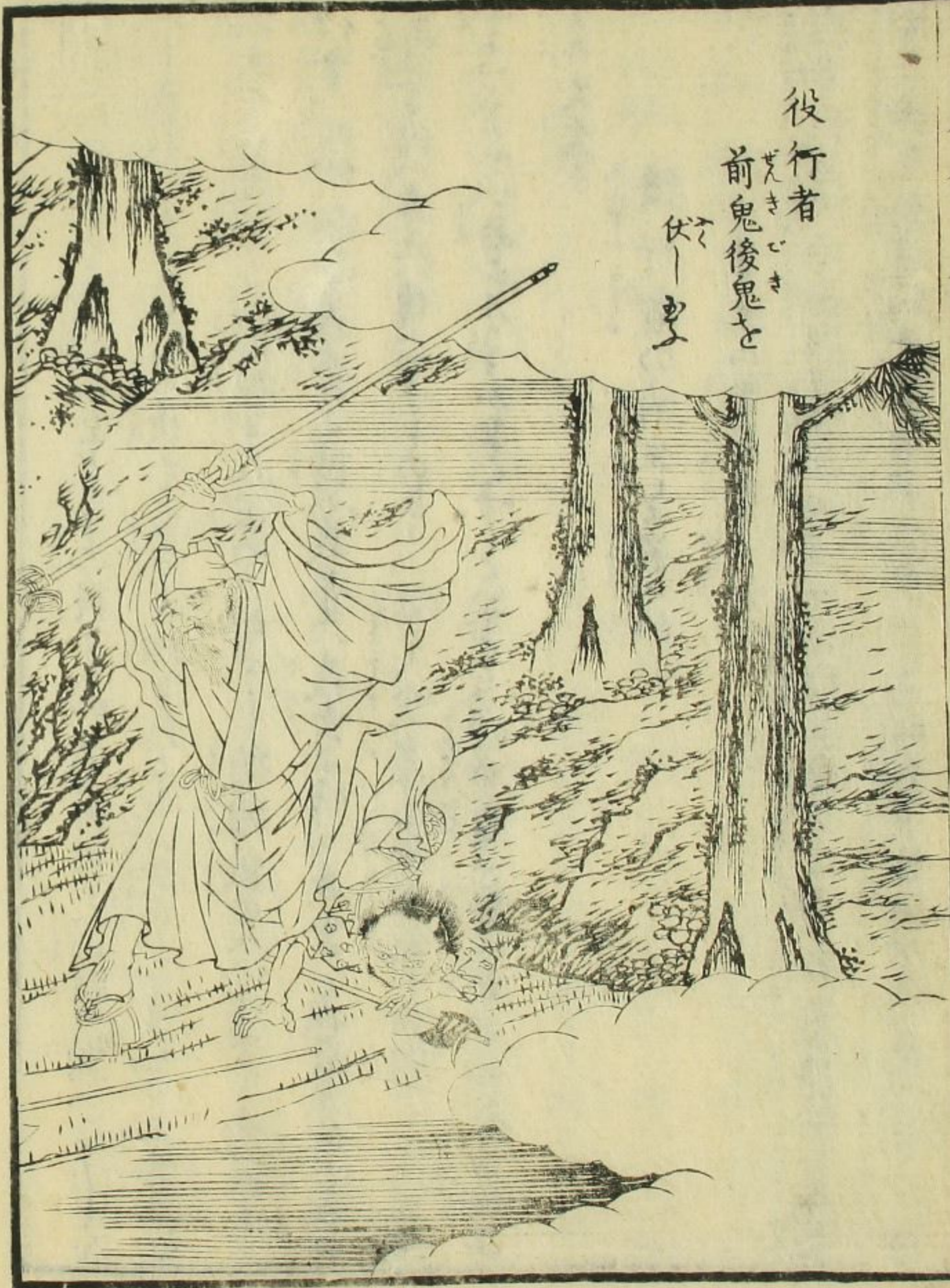
後行者の前生を論ぶ話

並十二數來復之話

法華經普門品曰。觀世音菩薩以何因緣名觀世音。佛告。無盡意。昔菩薩善
 男子。若有無量百千萬億衆生。受諸苦惱。聞是觀世音菩薩一心稱名。觀



役行者
前鬼後鬼を
伏し置



世音菩薩昂時觀其音聲皆得解脫云又曰觀世音菩薩成就如是功德以種種形遊諸國土度脫衆生云云云役行者七生のせんより天竺唐土日本より修行し其の皆是菩薩の權化なるべし日本神仙傳湯河之玄圓曰弘法大師天竺よりハ勝鬘夫人唐土よりハ慧思禪師日本より現しく聖德太子皆是觀音之權化と云云云土佐室戸之縁起弘法大師曰在天竺名勝鬘夫人於震旦名衡山慧思禪師於大峯名役優婆塞於葛城名法起菩薩前生言上宮太子今世号空海と有り是等の文より考りし聖德太子役行者弘法大師皆觀音權化と見たりまづ聖德太子の前生を救世觀音といへる百齋國聖明王を救世觀音の化身と云其子威德王父聖明王死し其の後戀慕やがらく救世觀音の尊像を作りて父王如在ははり夜の夢に父王告王く今日日本に生れ厥戸王子と云と見く夢ハさめり依之大に喜悅尊像を日本へ送り聖德太子は奉る則天王寺の金堂小

安置し手是より云云權化なるを云あり觀世音菩薩ハ正法明如来なり此故も般若の位を菩薩より下りて衆生と化度し其の母の子と愛するが如し此故も觀世音と云母として子の声を聞き見たりまづ是愛情のふりなり衆生を子のごとく愛し其の意より世の音を觀と云是を大慈大悲と云より厥戸皇子ハ萬葉の御位を好む玉に佛法を信し國々小國分寺を建て及び八天王寺を創建し六万射の石佛を作りて地よりは靈場と敬田院日吉の施藥院療病院悲田院の四院を建まり後田院ハ僧俗とも戒律を保つものと置常法華勝鬘經を講ぐ施藥院ハ貧病者小病者を治し療病院ハ困窮の病者を養ひ悲田院ハ鰥寡孤獨の者を置鰥ハ老て妻なき者寡ハ老く妻なきもの孤ハ父母なきもの獨ハ老く子なき者是のごとく難岐の者を救ひ禁中ハ十二階を定め其の大徳小徳

四位なり。大仁小仁ハ五位なり。大禮小禮ハ六位なり。大信小信ハ七位なり。大義小義ハ八位なり。大智小智ハ初位なり。是位階のしめなり。各夜の色ともく上下の別あり。まゝ十七ヶ条の憲法を定め天下の政を正しくす。是廣大の御徳なり。ふよめく聖徳太子とす。就中役行者の前生を聖徳太子なりと。室戸の縁起あり。是ふよめく考ふ推古天皇二十九年二月五日。聖徳太子班の宮小わく入滅す。其後舒明天皇五年三月。行者の母靈夢を蒙り懐妊す。此間十二年あり。都く十二の數をとりて來復とを易ふ坤の卦を十月とす。復の卦を十一月とす。日もまゝ是の事なり。東方ふ出書の六時をせき。西方ふ没す。夜の六時をせき。十二時ふす。木の東方ふ復す。是也。十二因縁あり。無明行識名色六入觸受愛取有生。生死あり。生死より無明より復す。是車輪の事なり。佛祖釈尊久遠の仏なりとも。人界より生をうけ。十九出家。三十

成道と云。是難苦の行ひ十二年ふす。正覺成道す。佛界に復す。玉ふ。聖徳太子御入滅より。十二年ふして。役行者御誕生あり。まゝ太子の再生す。玉ふとわし。この

役行者石橋を架んと慮り玉ふ話

並韓國廣足譏養之話

役行者ハ金峯山より。山上ウ嶽王置至嶮々たる。峻岨の棧路をひく。まゝ金峯山より。金剛山へ往來のため。石橋を架んとを慮り。鬼神天狗の類ひを驅使せしむ。前鬼後鬼を命す。玉。二鬼畏く是を。諸國の靈場。觸り。都く高峯絶嶮の所ハ。鬼神天狗の類ひをむといへり。峻及富士山下野國日光山。加及白山。越中立山。上野國城義山。紀高野山。山城國比叡山。同國笠置山。愛宕山。醍醐山。鞍馬山。仁岳。伊吹山。三上山。讚為雲邊寺。象頭山。

白峯八栗ヶ嶽常陸國筑波山出羽國湯殿山遠加秋葉山豊前國彦山伯耆國大山筑後國高良山筑前國背振山日向國霧嶋山越後國越前山香香山信濃國淺間ヶ嶽御嶽駒ヶ嶽羽羽羽黒山勢加朝熊ヶ岳土佐國足摺山豫三石槌山豊岡山甲身延山此外諸國渡り所なく。通達よおまひけり。依之金峯山は集り天狗ふまつ鞍馬山僧正房。愛宕山太郎房。比良之山二郎房伊豆奈之三郎富士太郎。畿島之三鬼神。上野之坡義房常陸國筑波法印彦山之豊前房大山之伯耆房。叡山之法性房。肥後之阿闍梨。高雄之内供奉。白峯之相狹房。秋葉之三尺房。高野山之法性房。坂之浦之大郎房等あり。大峯ふ八金平六葛城小八高間房。此外眷屬無量百千万あり。前鬼後鬼ハ行者の命を蒙り。鬼神天狗を配と諸方の石を集。其研々たるへりまじまじと。絶碓より瓦々として。磴礎とさむむ。是ごとくまゐる。晝夜

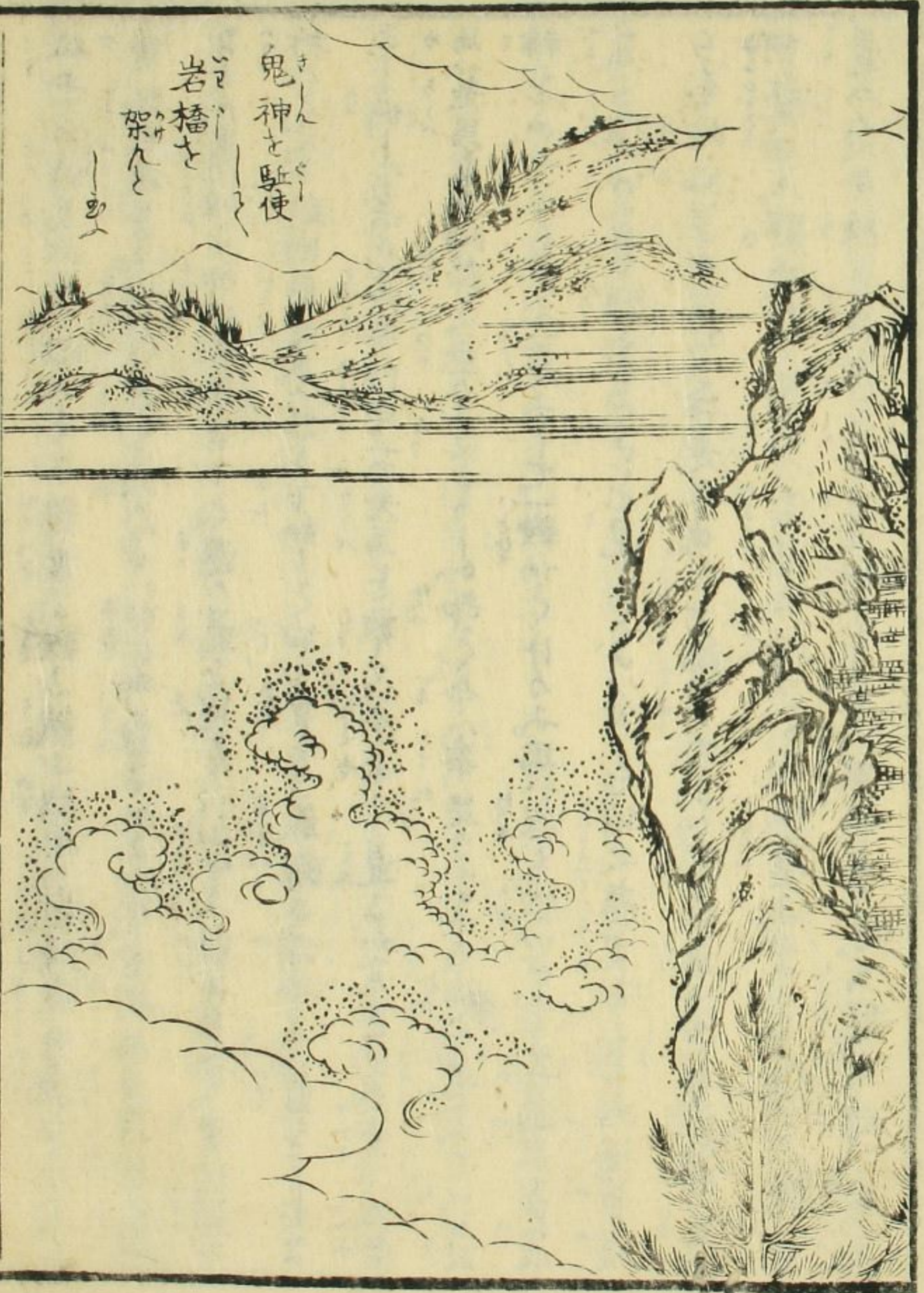
を別たも。尔時一言主之神。前鬼後鬼よ告玉く。晝の働きを止免。夜毎よ出く造りべと示し玉。二鬼畏く諸的天狗も觸く。晝ハ休めて働きてはなざりり。行者ハ神通自在よして。遲滞せハ妨の何れもを慮り玉ひく。二鬼を召こ。急ぎ造りべと。嚴しく命し玉。二鬼答へく。我々ハ師命よ違ふと粉膏の働をせせし。一言主之神。晝の働を禁し玉よの何れ。夜毎よ出く石を集め。晝働を凌ぎ。霎時し懈怠せらるるを。然まとも。目役を待て。碓々たる石を動し。東天のひよもれ。山林幽谷に隠れ空しく。まゝ終日を待故よ。遅々よ及ぶ。是のごとく罪なきを免。遲滞の由ハ。一言主之神よ玉へと願へ。行者ハ直よ。一言主之神よ。晝の働を禁し玉ハ何故ぞや。遅々よ及ぶ。妨の何れもを遠察し。心易の何れもを。目ハ。一言主神。面を隠し。こゝへ玉く。晝中を禁せらるる。石橋を忌嫌よ。我容貌の醜くきを。取くまらぬ。ハ行

昔かありしと。うらみ玉ひとと佐言。行者ハ地全神の詞。したせうく。急ぎ
 王と女神の御心を遠慮し。晝の働きを禁じ。夜毎小幡を造り。あまの成
 就ありとせし。譏者の舌頭よりかりまの有り。行者の遠察。少くも遠く
 是を神通力と云ふ。人。爰ハ韓國廣足と云ふもの有り。倭所邪智の癖者なり
 行者のま。茅原御子居。王よとき。咒験を頭。上下尊卑の差別なく。死
 苦生苦。病苦の難とせし。或ハ恐憎會苦。ま。ハ死心霊の宗。諸の火寺を
 除き玉ふ。神の如。依之諸人尊敬せらる。かぎりなし。廣足ハ貪欲の心
 深く。今役行者を教ひ。種々の珍物奇者を持運。群集し。けりを見
 く。我身も行者の如く。人の教ひを請。多くの財宝を獲。ばやと。欲心を發し。
 茅原の里。行。行者子辨。問。倭辨を振。ひ。詣。ま。曰。行者の咒験神の
 如。天下。教。せ。ざ。ら。ば。我。常。は。尊。信。を。の。り。浅。う。と。今。此。里。は。本

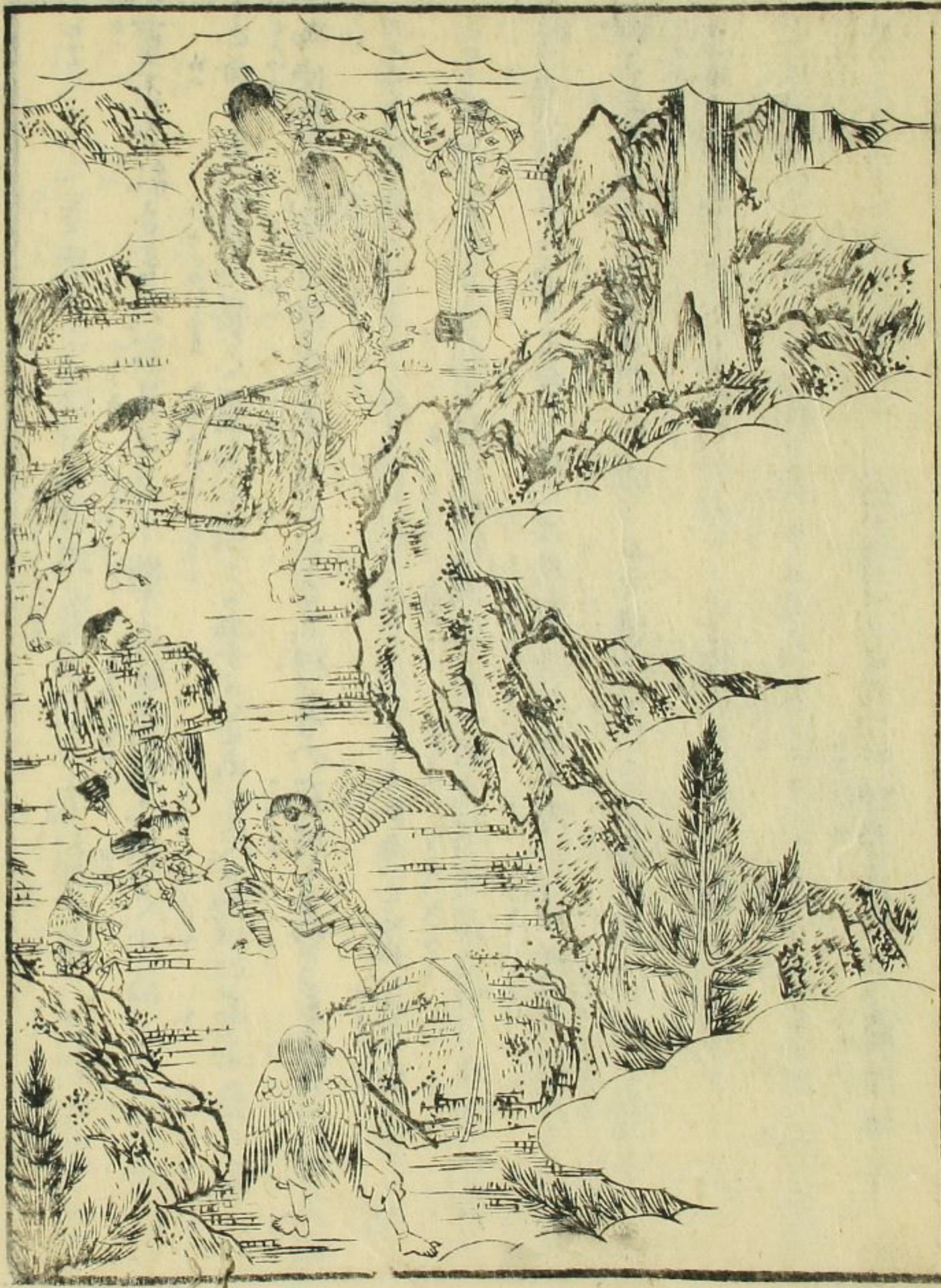
佛門。入。く。咒術。を。ま。う。の。り。を。免。く。優婆塞の行。ひ。を。傳。へ。玉。へ。と
 願。ひ。ら。行。者。ハ。廣。足。が。邪。佞。の。詞。を。聞。心。中。の。謀。畧。を。見。貫。き。恐。む。べき。者。あり
 とも。如。是。惡。人。を。化。度。せ。ば。廣。大。の。功。徳。を。と。ん。と。謀。り。玉。ひ。く。女。今。よ。り。女。一。と
 怠。り。つ。ま。の。れ。と。優。婆。塞。行。を。傳。へ。玉。先。優。婆。塞。の。行。ひ。と。い。へ。ハ。在。家。出。家。と
 通。じ。頂。髪。を。殘。を。而。こ。よ。く。餘。ハ。皆。比。丘。僧。の。威。儀。の。如。く。次。ハ。五。事。を。斷。を。べ。い。一。
 六。肉。食。二。ハ。五。辛。三。ハ。飲。酒。四。ハ。婬。欲。五。ハ。不。淨。の。家。子。食。せ。ば。如。是。一。て
 潔。齋。精。進。を。な。す。へ。是。嚴。密。に。戒。慎。せ。ば。妻。子。を。帶。を。と。も。采。地。成。就。を。な。す。べ。と
 か。一。三。ハ。廣。足。ハ。謹。く。行。者。よ。あ。ら。わ。ぬ。戒。を。保。ち。優。婆。塞。行。を。怠。り。なく。勤。り。こ。と
 三。百。日。よ。及。ぶ。と。果。し。中。も。驗。を。見。む。ま。く。秘。文。秘。印。の。傳。へ。な。ま。ま。と。深。く。恨。み。或。時
 行。者。の。前。に。頭。と。下。戒。を。保。ち。師。は。仕。ま。り。三。百。餘。日。を。り。何。と。く。咒。術。を。傳。へ。玉。ハ
 さ。ら。致。と。云。行。者。曰。く。汝。肉。食。を。禁。じ。婦。女。は。不。近。奇。不。淨。の。家。子。不。行。優。婆。塞

行子似たれども心は戒を不保衆生を救へ心なく我立身を願ふ是邪位の心
 あり。咒術を傳ふとし。其験をあらはせしことかき。咒験を顯し諸人を助んと思
 う。心は深く優婆塞の行ひあらべしと。廣足が五臟六腑を見めきしごとく
 嚴戒を下し玉へ廣足是を深く怒り。直に茅原郷を退行者を誑誘し種
 種の妨をなせしと申し。廣足の詞を信するものさしになし。依之空く年月を
 経るよきとありぬ。行者ハ仙術を獲。飛行自在の身となり。益盛んし。深山幽
 谷に分入靈場をひらき手。其功德廣大無量なり。廣足瞋恚止時なり。然し
 今石橋を架んとし玉ふしを知り。是を種とし。行者を罪ふかとさんしを謀
 謀しと曰。役行者ハ深山魔界の幽谷に籠り。不思議の邪法を熟煉し。通力
 自在にして飛行の身となり。鬼神を馳使し。諸國の天狗を集め。葛城の山峯
 子護り。天位を傾け。神國を魔界とせん。企て。速く征討せんと。天下の乱まて

なるべしと。奏聞ふかよひけり。諸編鷲王とし。役小角ハ正行の聞へり
 實否を亂さばん。容易に卷し難し。汝葛城小行と小角とを連きたるべ
 と命し玉へ。廣足畏く。直兵を撰と五十人を志す。葛城の峯に登り。勅命の
 御使なりと。威を振て尋るといへし。行者の在所を志す。是ハ行者神通
 力をとて。廣足の來りを知り。惡むべき者なりと。勅命とあらば。背難く。まは因
 なるん。謂れし。と。扱及箕の西山へ飛去り玉。依之廣足尋得るる難し。前
 後鬼ハ行者よき。のめく去り。其外鬼神天狗の類ハ。皆幽冥の者にして。凡
 眼に見るる叶し。廣足怒れ。眼に血を儼ぎ。峯に攀躋り谷子下り。千變万化して
 東西に奔走し。尋るる三日三夜して。道をししよひ踏まよぬ。北に向ハ嶽々
 して登り。道なき。まは南方に臨め。嶽深やく進み。獲む。東に行。葛原
 衰々として。踏分難し。まは西に行人とまれば。松柏森々として。道路絶たり。至



鬼神を
使
岩橋を
架んと
す



後行者
経傳
記圖
會卷
下

從五十人進退此死極り。まづ糧盡て既餓臨めり。亦時從者詞とてつぐ
勇猛精進なる。役行者を攻めんハ化の術意よかなむ。金剛藏王權現の討
まじん皆一同神佛に候言く。還り道を得むんハ山中餓死まへ。速權現を
祈んとへ。韓國廣足大に怒り。下知く曰く。昔より戰場に深入て。道を
あへ例しあり。其時陳中一の老馬を放す。本來一道よかへるといへ。幸ハ我衆
馬ハ老馬なり。峻路を登り足さりが却と今ハ事足りぬんと馬あり下りて口を取
輪をめぐらむと。三度よして一鞭をくけり。馬ハ忽ち駈ぐ。其速きハ飛
鳥も及べぬ。既よむぐと見ゆしなむと。依之廣足をこめ。從者殘
らむ峻路を志のた。奔走つ。凡十餘下して。やうく追はせらる。此時馬ハ
何驚けん。驛のりて。遙の溪間ハ顛びおち。微塵よなめて。まぐハ見へむ
道ありべし。放て馬の道をまき。方へ行へ。不思議なりと。大膽不敵の廣足

仰天須更詞ま。依之咎々奇異のちもひきをよせり。不思議よりか。忍
山中鳴動して。大山崩々たる。俄に空のき曇り闇まり。墨を流せり
如く。其中小声有りて。カニ廣足汝が舌頭を振ひ。罪なき行者と。誤言して
主上を迷し。勅使と号して。當山よ来るとも。行者ハ神通自在にして
飛去り。毛も廣足等凡夫の。及りしあり。例せば。蟻蜂が各。猿猴が日と
云べし。今も思ひありせんといへ。從者是と聞て。恐れ畏れ。魂と天邊に飛り。身ハ
地上に卧り。廣足忿怒の相を。虚空を白眼で曰。役小角謀叛の企をせ
よ。鬼聞に達し。其罪を糾明せんとの勅使あり。惡鬼外道の知るよ。何ら
ぞと。云詞の終りに。數千惡鬼虚空に顯ま。其相は。異形にして。各
銚をのち。或ハ鐵鎚斧を。かざして。向ふと。見定
ぐ。皆夢の如く。且酔りが如く。足の踏所を。此山頂より。烈風起る

百を飛一木を吹例たり。廣足をとめ。從者殘を岩角よりはくこ
 へとも。力をよき。幽谷は吹かたされたる。塵をちりふり如くなり。五十餘人ハ
 志どく悶絶してつり。軍夢のえんり如くおきあがり。辛うして幽谷を
 逃れいぐ。皆再生のおもをよ。君臣上下の礼をきて。さんくよよつと邪
 かりり。乞等の不思議ハ皆。天狗のませり業よる致。後世といへども。山上テ嶽へ
 參詣の輩。身よ不淨。或心よ悪謀を企り者。必嚴戒を蒙り。鐘懸岩臨岩よ
 どの。絶峻の行場よ至く。多年の積悪を懺悔し。俊齋精進の身よよる人多
 是皆行者の方便なり。畏るべし。尊むべし。

廣足謀て行者の母公を呵責せる話

並行者大嶋遠流の話

韓國廣足行者の行方をとまらむ。刺へ幽谷をかかたれ。辛うして逃れ

歸りれば。怒れ心日よ百倍。種々よ謀を按じ。行者を罪よ降し。人よ
 を企り。廣足參内して。返り言を中て曰く。役小角ハ邪法を行ひ。飛行自在の
 身となり。諸の眷屬悪鬼外道と師く。虚空を踏ぐ。葛城の峯をよび去
 其影を隠と。是違勅の罪免く。處を。多くをよを所せん。谷を用わり
 と。もつり。と。委り。依之諸郷驚き。或ハ方へ兵を配く。た。め
 る。既よ五十日よなごといへども。其在好をあらむ。諸郷評し。多ハ。よも唐王天竺へ
 も飛去すと。猶人數を増て。東西よ奔走。南北よ巡回。も。尋る。とき。棋
 碁其西山よ在つ。告まら者。直よ是を奏聞奉り。文武天皇。勅慮を
 一。急ぎ小角を追捕せよ。勅を下し。廣足ハ恨をもち。さん
 勅使とら。詰り。則御免を蒙り。百人の兵を撰。箕面山へ急ぎ。行者
 葛城の峯を飛去。當山よ来て行ひ。然り。神通力をもち。今又勅使廣

足の末のさきりゆ。懺の上の登り。石上の座。前もろ石。錫杖を建てるま
 請ふ。廣足兵を駆り。其面に至り。所々を尋ひ。懺の上の攀躋りて
 行者の石上の座。見ゆ。大に怒り。曰く。此皆城の峯。鬼神を集め。神國を
 魔界とし。天位を奪ふ。企り由。獻聞。違ふ。依之其罪。糺明の為。宮中
 召よ。上。勅命を下さる。則勅使。昔城。登山。と。と。と。邪法を行ひ
 當山。飛來。して。帝逆鱗。急ぎ。追捕。を。命。を。家。り
 廣足。罪。り。向。たり。召。捕。て。刑。罰。を。正。し。せ。んと。下。知。を。傳。へ。ら。れ。ば。兵。ど。し。行。者。の
 前後。尤。右。より。立。の。と。ん。と。は。行。者。も。も。動。一。あ。は。せ。廣。足。向。ひ。く。曰。く。我。昔
 城。在。り。謀。叛。の。企。更。は。光。ち。り。又。當。山。我。開。き。り。冥。場。も。あ。ら。ば。此。刑。子。在。り
 疑。ひ。を。よ。む。る。い。ま。ま。し。と。其。詞。の。い。ま。ぶ。然。が。ら。ふ。廣。足。高。声。に。あ。べ。り。曰。く
 曰。く。汝。謀。叛。の。企。く。光。ち。り。とい。へ。ども。是。を。廣。足。が。詞。を。あ。ら。せ。む。皆。勅。命。を。

背。違。勅。の。罪。逃。れ。難。し。と。へ。り。行。者。答。ふ。我。ハ。仙。家。今。幽。冥。の。音。同。ト
 せ。ん。ど。違。勅。の。罪。を。多。ん。や。廣。足。の。曰。く。仙。家。入。と。も。王。土。在。て。ハ。違。勅。の。罪
 免。れ。が。く。未。煉。の。應。對。を。止。て。速。く。罪。伏。せ。よ。と。云。此。時。行。者。身。を。翻
 前。に。立。た。ん。錫。杖。の。上。に。座。し。廣。足。心。中。小。驚。き。た。の。り。難。し。て。曰。く。杖。下
 王。土。下。り。て。行。者。忽。錫。杖。を。と。り。て。空。中。に。座。し。て。曰。く。勅。命。を。背。負。し
 而。と。然。れ。ど。も。女。が。子。囚。と。な。ら。ん。と。謂。ふ。と。虚。空。を。踏。で。飛。去。り
 廣。足。天。を。仰。ひ。て。須。臾。更。詞。を。今。ハ。行。者。の。ま。の。み。を。見。り。し。た。の。力。乃
 ち。む。ち。り。く。坂。を。下。り。半。服。至。り。尔。時。懺。の。底。より。黑。龍。頭。れ。生。鹿。の。等
 角。と。振。立。驚。ふ。似。た。方。此。を。い。は。せ。返。る。る。烈。風。の。如。く。廣。足。を。こ。と。め
 從。者。是。を。見。て。恐。り。き。り。限。り。な。り。足。を。空。に。て。進。ま。ず。坂。の。半。より。顛
 落。し。足。を。換。じ。或。ハ。面。を。破。り。さ。ん。ぐ。ふ。成。て。還。り。ら。ん。是。より。て。い。へ。く。廣。足

母を救ふる子未の願くば我身刑を蒙り母を免し玉と願ひぬ。依之孝心の
 かもなきを。奏聞しあひ小角の母を。茅原の里へかへし。小角八豆大嶋配
 流とへしと定めぬ。依之母を。茅原の里へかへし。行者を以て。今度葛城の
 峯に鬼神を集め。謀殺を企。猶飛行の術を行ひ。勅命を背き。身と隠
 事。其罪輕のしむ。依之豆大嶋流し。もるよのありと。勅命の奉むまきを
 仰渡されり。行者累て曰く謀殺の企すに。葛城の峯に在て。幽冥の者
 を。馳使し。謀殺の術を。金剛山金峯山の間に。石橋と架。後世にありて
 參詣の苦を助ん。為なる小角幼きより。優婆塞の行ひをなす。常小孔雀明
 王の咒を持誦し。家と捨山へ入。一切衆生を化度せん事を願ふの事あり
 何を謀殺の企するべきや。又其以前内府鎌足難治の病ひ。小臥し。醫療を
 加へ。神社佛閣に。祈念せらるると。虽も。さくに其験あり。既し命終し及んとす

其時齋明天皇の勅命を蒙り。咒力を得らば。三七日よして。病苦を救ふ
 依之参内を免す。ハ高位を賜ふ。内勅を蒙るといへども。高位高官を
 望ま。故に深く辞して。後我咒験の功を。百齋の法明に譲り。出家せし
 事。とんくも。身の榮花を好む。と。知り。承べきに。何れと。や。然るに。今。諛
 言を信じ。罪なきを。遠嶋に配し。政道の。我ハ修行の功成
 就して。神通力を得。飛行自在の身となれり。如何なる遠嶋に配せらるるとも
 さくに苦ハ。然りと。い。是の如く。諛を信じ。無罪の罰を加へ。天下の
 乱基と。あ。伏願く。諛者を退け。賞罰を平く。仁政を。と。かへし
 憚死を。速。諸綿額を行。口を。然れとも。諛を。遠
 罪を決して。奏聞し。及び。容易に。是。非の。及。遠
 流の。改。亦。時。行者御年六十六歳あり。文武天皇三年二月十日

女行部傳記圖會卷之十一



女行部傳記圖會卷之十一

廣足金剛山
鬼神の
登りて
いりたる人々
いま
めよ
河よ



十一

都を去り。伊豆國へ入りむき。遠路を守りし兵士五十人其嚴重なる
 さをうらみ朝敵のごとし。日を累く。豆芟より。下田浦より衆船。海上
 長閑にして風波の難もなく。大島より着岸す。行者陸よりみひ。磯辺に
 一つの石ありをみ多みて。其石に座して。秘元を持誦し。後世此石を腰かけ
 石と号し。流人此石に座して。島の徭目を。安んじりとハもみりとのや

廣足神罰を蒙り死亡行者歸俗之話

並行者唐土へ飛行の話

抑大島といふ。八人皇六代孝安天皇の御宇開闢し。教百年の後
 ふつたり。漸々よ人住と云ふ。伊豆國より。加茂郡下田浦より。東南よ
 り。海上十八里を隔。廣きこと。東西二里半。南北五里半。餘り。此外は
 小島あり。佃島。利島。相島。新島。山伯島。志貴根島。神集島。二宅島

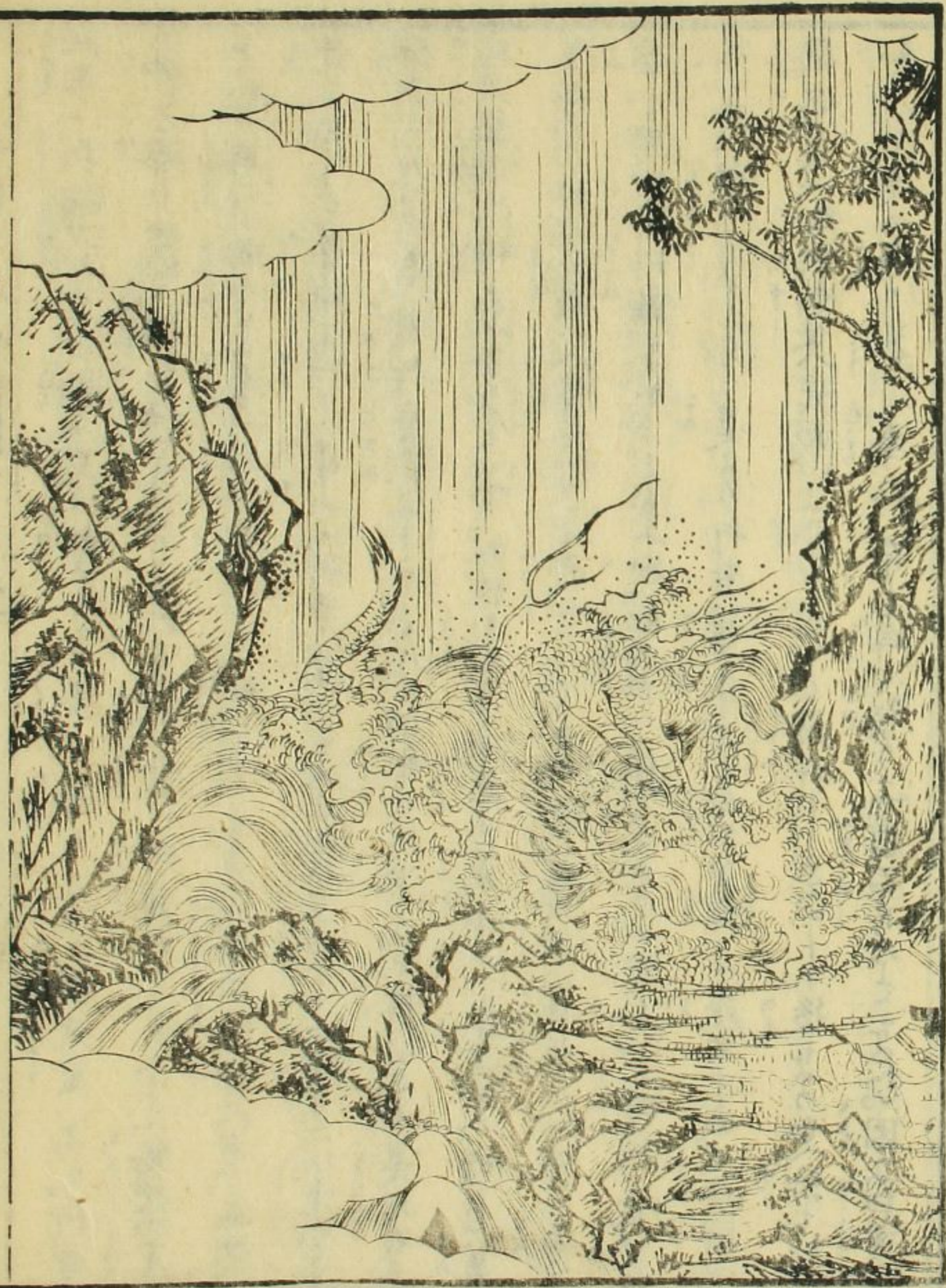
御藏島等あり。是より南方遙し海上を隔。八丈島あり。如是小島多き也。小
 大島の名ある。放開闢以來千餘年の。星霜を輕といへども。糧乏しき也。人住
 人い。稀にして。一食をして命を續ぐといへり。かゝ難所といへども。行者
 厭ひたまは。晝六島に在て。秘呪を持誦して。禁を守り。夜に必し富士の
 峯に登り。龍樹菩薩ふさつ。のり。真言の密法を行ひ。黎明ふかよ。大嶋
 子歸り。海を踏で走る。陸も行くが如し。まゝその速き。飛鳥も及ぶ
 也。行者。幼年より。四天王天蓋を持て。守護し。まも。雨衣を濕さ。今も通
 自在の神仙なる。よよく。雲を踏風に乗。まも。風雨は。厭ひ。か。これ
 子よ。一日の解怠も。富士の高根を通ひ。至る。既。其年。暮。明。文武
 天皇の四年。と。は。ま。り。母公。呵責。を。免。れ。茅原の里。に。あり。行者の。つ。り。
 の。こ。按。煩。ひ。み。ひ。一。子。豆。芟。大。嶋。へ。配。流。せ。し。と。聞。み。ひ。り。より。悲

勅使兵を馳して大島へ渡り。行者を召す。勅命をり達すと其詞曰く。遠流の
制禁を破り。自在に飛行。悪計を企むのよし。獻聞に達すと依之殺刀を下さ
とす。行者答云く。悪計を企むは。高峯の登る。天下泰平を祈
又母の病あるを志す。茅原の里に行事。遠流の制禁を破り。似たり。言
て破らば。夕べに行き朝に歸り。晝に島に在り。是制禁を守り。也。然りと畢
諷を信ず。糺明しなく。死を玉う。仁慈に洩たり。と。天命を辭するを
得んと。速に座に頭をのぞく。殺刀を待す。勅使下知を傳へ。太刀とり。の者
行者の後立。既に太刀をあげんと。忽ち眼閉。顛倒。勅使大
小怒。太刀とり。の者。則太刀をとり。立。同く眼く。と
て尻居。又伏りて。進。奇。同く太刀をとり。断。是の
是のごとく。三度。殺。勅使を。皆一紙

奇異の奇ひと。急き歸路。不思議の。見。突。聞。か。の。火。い。れ。ハ
帝を。奉。一。紙。太。刀。を。ひ。猶。あ。ら。し。め。と。上。言。り。て。行。者。は。殺。刀。を。下。さ
んと。せ。時。日。を。尋。す。則。十。月。二。十。五。日。の。上。刻。より。勅。答。奉。り。依。之。不。審。す
思。召。す。時。日。を。尋。す。則。十。月。二。十。五。日。の。上。刻。より。勅。答。奉。り。依。之。不。審。す
の。夢。子。天。王。鉞。を。持。り。て。天。降。り。廣。足。を。責。て。曰。豆。豆。大。鳴。よ。あ。め。く。後。行。者
今。既。に。殺。刀。を。蒙。り。て。是。皆。汝。の。誤。言。よ。罪。を。な。す。と。危。き。に。臨。む
と。い。へ。も。諸。天。善。神。行。者。を。哀。れ。と。助。け。汝。の。罪。を。責。め。い。の。め。く。と。鉞。を。あ
げ。て。擲。め。廣。足。を。と。り。し。り。限。り。ま。す。其。苦。惱。を。た。へ。く。の。声。を。發。り。り。成
家。内。の。者。も。ち。よ。り。て。必。抱。す。依。之。夢。受。た。れ。と。も。五。鉢。崩。々。が。如。し。て。九
死。一。生。の。病。と。な。り。是。同。日。同。刻。より。不。審。す。力。を。り。か。す。り。と。神
仏。の。冥。慮。を。る。べ。し。と。ん。り。して。廣。足。七。書。夜。の。苦。無。間。地。獄。の。呵

偽り月満て男子をうめりて一き天子の御落胤まんども。賤の女の胎よや
 どり多し如へ匹夫のうちへ入るよの甚悲しくて有りけんども。君の御名を穢
 奉りこの恐れ多く六十九年の其間口外へてさざりて今日勅命の御尋
 辞とるよかなよも。奏奉りなりと。具し述ぶ。是を聞大ひに後馬夢の覺
 たり如く急ぎ此よをも。奏奉りりる文武天皇不容易のなりと。獻慮をも
 めぐらしむる。今度博士の勘文小大聖人なりと有り。此故なる歎され。廣足が
 謗言みて有り。行者の御疑い晴れ。急ぎ老母を。茅原の里よのへし。速く
 小角をめ。罪なきよとや。命。玉ハ一同子畏て直。老
 母を送り。大島へ勅使を差向。勅使ハ急ぎ都。玉。着。風を待て。嶋下渡海。行者を尋。邊見へ。山中分け入り。行者ハ石上
 座して。秘呪を持誦。玉。勅使是を見畏。進奇。尔時行者ハ神通力を

とく。勅免の御使なるよを。知。石座を下りて迎へ。勅使ハ礼をば
 勅命を達。其詞。廣足が謗言なるよ。行者の流罪赦免。玉。あり
 と有り。行者謹で勅免を蒙。則勅使と同船。纜を解。加茂郡
 小渡。日を経て歸俗。勅使ハ行者ゆ依のよを。奏奉。文武天皇行
 者の神通自在なるよを。獻感。参内を免。玉。行者ハ。是
 を辞。茅原のよに。母。是。後。天下一統。行者を
 尊敬。以前。百倍。文武天皇御心易のよ。舒明天皇の御落胤と
 云。正行の彼小角を。廣足が謗言。述。罪なきよを。遠流。事
 朕。不徳。速く小角を召奇。命。早々茅原の里。行。勅
 命を達。行者元。宦位昇進。依之。畏。勅命を
 辞。未世の衆生を化度せんよを。願。免。玉。密。辞。玉

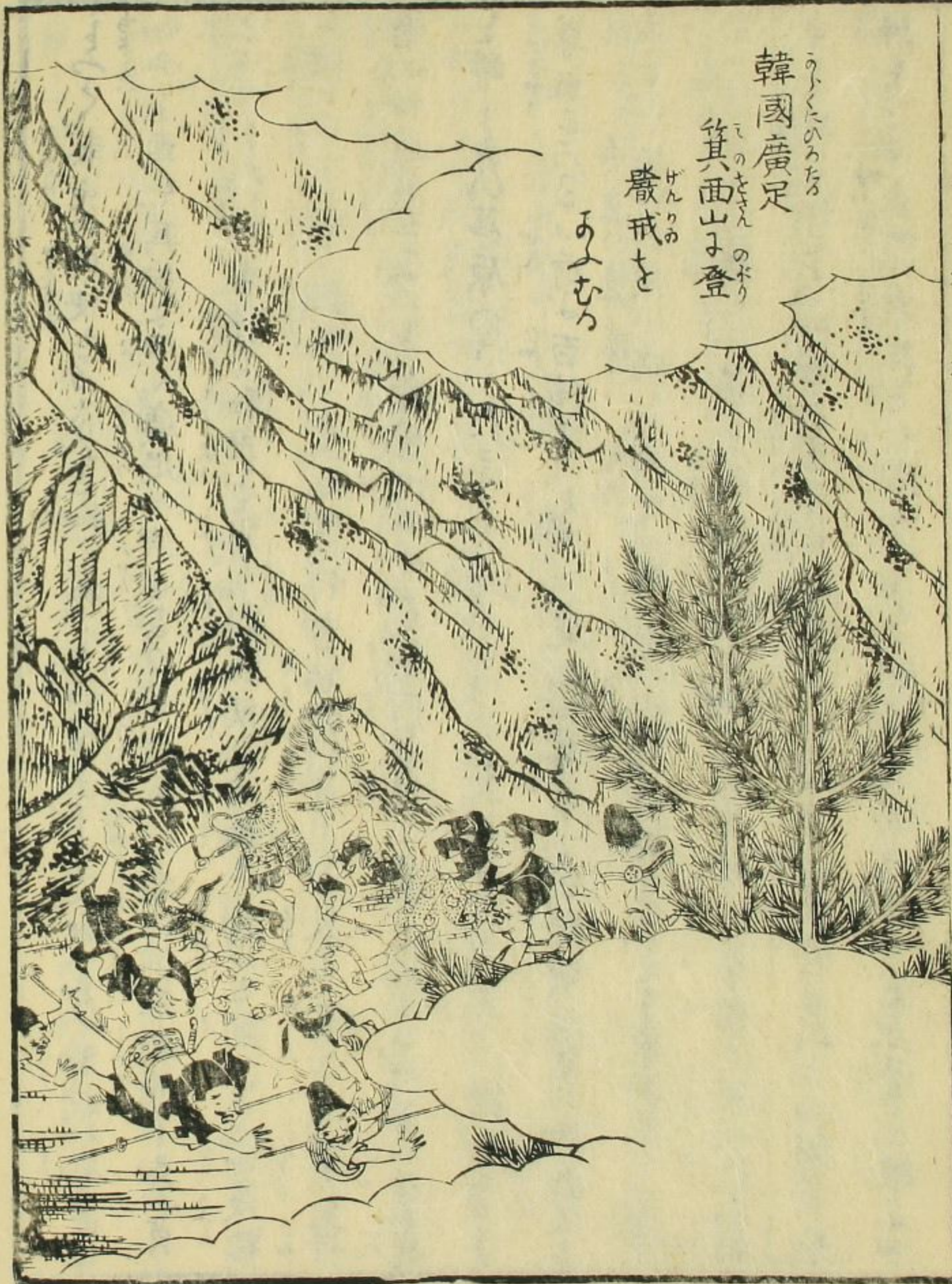


韓國廣足

箕面山子登

巖戒を

あむる



並楠正成侯武德之話

吉野山千本の松とて、峯々谷々子もあつて、ひとめも見ゆるまゝのふたたくひよ
 きちの欠きて、雅俗に通じ、貴賤のへびて、木もくま、散際のまぢやのあつても
 て花の主として、種々乃花ありて、紅ひのいろをまじり、童蒙の眼をよら、
 一むと、散ぎつゝ、甚拙きや、人の武士は、さういして、さういして、古きうに
 看て、こゝろ、ゆる、松を、めくたり、神、ありて、その中、そのの、
 かくめし、深きうろの、ゆる、まぢ、その、松、まぢ、楠侯の、此山、皇君を、
 とも、皆、後行者の、御威徳、なれば、と、帝、このくよら、ひも、あまの、櫻と、植さ
 せ、永く、權現への、向と、し、その、由、未と、尋ら、皇、九十五代の、帝、醍醐天
 皇と、申、奉ら、教、原院の、文保、三年、御位、子、昇、文保を、改め、元應と、号し
 る、尔、時、鎌倉、八十代、將軍、守、邦、親、王、なる、執、權、北、條、相、狹、守、高、時、時、政、より、九

ふ、う、つ、つ、武、威、を、耀し、奢、り、長、し、天子、を、始、め、奉、り、將、軍、家、を、し、設、け、依、之、
 秋、田、城、之、从、時、顯、諫、言、再、三、よ、り、及、び、て、と、ま、つ、に、用、ひ、む、長、崎、入、道、圓、喜、同、新、左
 衛、門、高、資、な、と、い、へ、ん、倭、臣、と、愛、し、我、意、を、募、り、天、下、の、政、を、擅、り、長、崎、父
 子、上、は、諂、ひ、下、を、掠、奪、傍、若、無、人、の、振、舞、あり、尔、時、後、醍、醐、天、皇、の、御、子、恒、良、親
 王、と、東、宮、子、立、あ、ま、の、よ、り、鎌、倉、へ、宣、旨、を、下、さ、る、高、時、是、を、違、背、し、て、後、二、条、院
 の、御、子、邦、良、親、王、と、東、宮、子、進、え、奉、り、餘、は、是、を、須、ひ、宮、中、の、つ、と、い、て、都、て、鎌
 倉、の、こ、の、つ、と、い、と、い、は、な、れ、り、帝、是、を、お、ろ、く、惡、ま、せ、り、方、里、小、路、中、納、言、藤、房、卿、日、野、中
 納、言、資、朝、卿、二、条、中、將、為、明、親、右、少、兵、衛、後、基、親、土、岐、左、近、賴、負、其、外、五、三、人、を、召、て
 北、条、高、時、と、て、ま、ん、の、と、密、計、を、入、げ、れ、山、門、寺、門、南、都、十、津、川、熊、野、三、の、山、の、亮、法、師
 と、招、き、其、後、諸、國、の、武、士、を、召、奇、し、り、へ、き、よ、決、せ、り、然、る、に、未、だ、左、近、賴、負、鎌、倉、の
 威、勢、を、恐、れ、六、波、羅、へ、逃、げ、行、常、盤、駭、何、守、へ、密、通、し、及、び、り、駭、何、守、大、河、か、ど、り、き

兵小命。直下日新中納言資朝卿右少将俊基卿。二条中将為明細を
め捕て。鎌倉へあくり。密計のかもむきを訴ふ。高時大に怒て密計の始末を問
ふ。三綱口を闕てさうに答へ玉ふ。高時忿怒して。左右を見まじ
長崎新元衛門高資小命。下島の半は渡。強問は及べし。きびく下
知も傳ふ。高資元來礼儀を弁ぬ田舎武士。ことに佞肝の辯者。高時の
下知。あつぬ。三綱を庭上。下下し。下島小命。責問といへども。一言も發さず
二条中将為明細やうく。詞をこつて

かほひきや。この一き。時の道。憂世のをもと。つる。座をこつた
是よみたまふ。其意を弁ふ者もなく。猶ほよく責問。二を哀れ。高
秋田城。夕時頭。是と聞。大に驚き。高時を諫て。へらく。高位の貴人。下島の
半。下し。可責とる。ゆゑ。外の。あり。ま。東。夷。よ。和舟の。心。弁。から。放

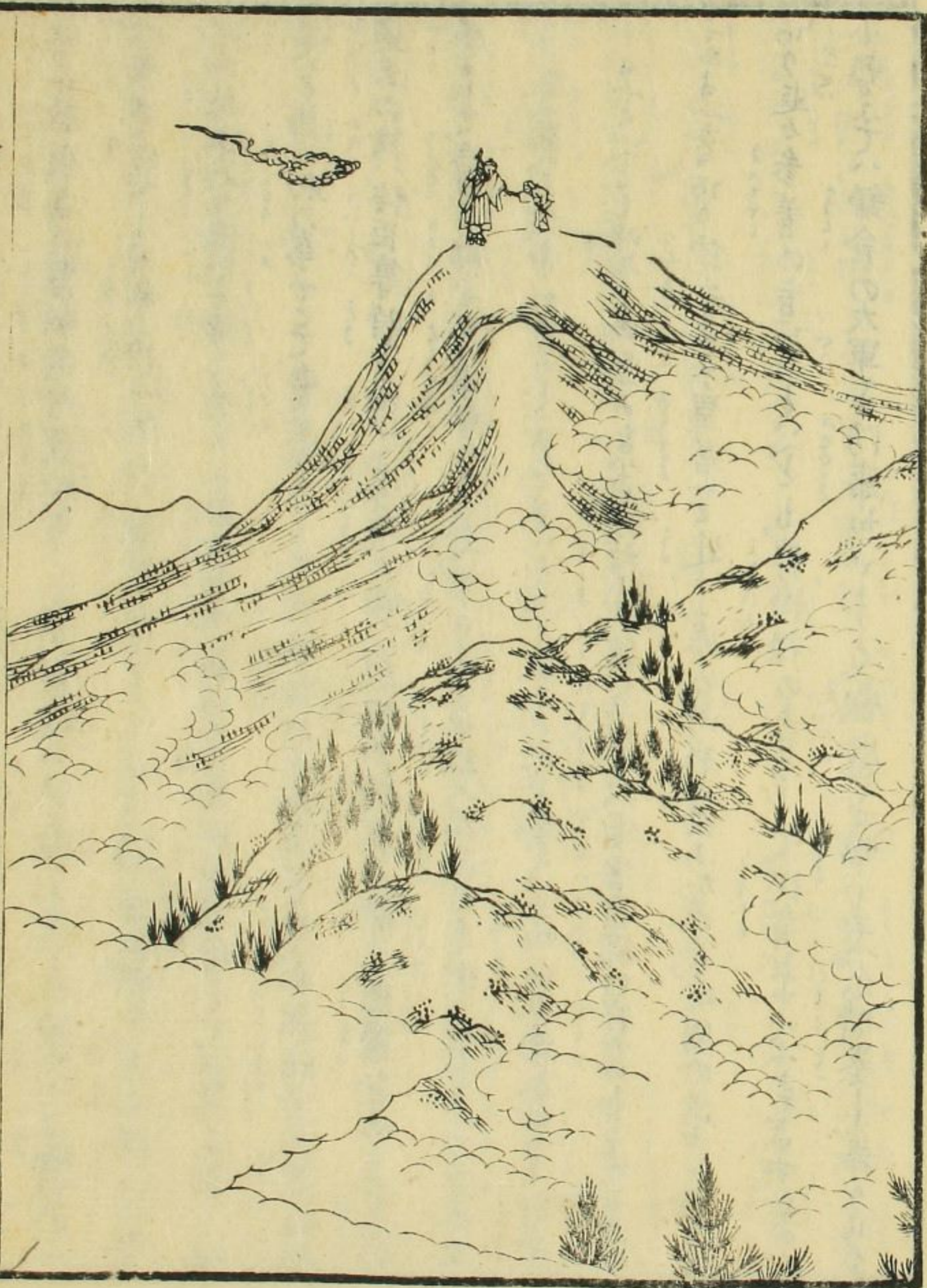
と諺り。をうく。北条家の。恥。あ。り。速く。免。り。と。席。を。う。は。て。諫。れ。ん。は
是非なく。責を免。て。獄屋。に。繋。ぎ。り。ん。却。説。都。小。三。綱。の。囚。れ。と。なり。あ。ひ。よ。わ。く
本。小。駭。動。一。敵。聞。は。達。一。り。や。也。向。心。を。腦。一。か。い。種。々。評。ト。お。ふ。と。い。へ。ども。何。れ。も。力
か。よ。む。唯。密。計。の。使。聞。入。り。と。の。勞。一。き。い。り。ん。爰。小。万。里。小。路。藤。房。卿。ハ。鎌。倉。小。下。向
して。高。時。不。理。解。して。三。人。の。囚。れ。を。救。ひ。本。と。り。へ。ん。進。く。と。願。ふ。帝。を。と。り。め
諸。卿。一。紙。免。さ。り。小。思。召。け。れ。ども。藤。房。卿。ハ。志。あ。て。願。ひ。急。ぎ。鎌。倉。へ。下。向。一。ま。ひ。日。と。累
て。鎌。倉。小。着。一。宣。旨。の。御。使。あ。り。と。つ。り。り。ん。ハ。高。時。問。之。く。武。威。を。も。つ。く。取。控。入。り。の
と。謀。り。を。旅。館。に。休。息。を。進。め。置。對。面。の。用。意。を。專。小。を。書。院。の。上。座。小。ハ。初。使。の
席。を。設。け。向。上。座。上。ハ。北。条。高。時。次。小。ハ。長。崎。入。道。圓。喜。同。新。元。ハ。高。資。秋。田。城
之。从。時。頭。其。外。一。門。三。十。八。人。武。士。三。百。六。十。人。列。座。一。旅。館。へ。迎。ひ。を。ほ。の。り。し。り。ん。万。里。小
路。中。納。言。藤。房。卿。ハ。早。速。小。登。城。一。席。不。進。く。多。く。左。右。列。座。の。武。士。背。を。あ。つ。へ。く。履

重小ひのた。藤房郷八上座よなり。勅命のあしむさや度人謹で終聞あるべしと
 勅書と捧げ仰度さく。今度鎌倉へ召下も三人皆政上人なり。奏聞よかよ。世
 威さとも召捕らゆ。天位を恐れざるものあり。速に度りかへをべしと。勅命や
 とりりん。高時とこも恐るゝあなく。疑いさるゝ有るよりの。召捕て尋聞
 みかよ。是皆天下泰平の為なり。天下の政道ハ奏聞よかよ。鎌倉よか。執
 事との。高時のあつら。後白川院より。頼朝將軍へ六十余。惣追輔使た
 々々。政事を預け平よなり。去れ。今高時のもの。ひを妨げぬ。先帝の勅定
 也。破れ。手の理。藤房郷曰く。疑いさるゝ。奏聞よか。光明の言
 たり。後白川院より。頼朝將軍へ。惣追輔使を。免。三とも。我意を。と。せよと
 免。平。ま。此度。か。ま。如何。高時答。此度の疑ひ
 天下の為なり。天子御謀叛の御企有之。慥に内通の者ありと。猶微細を尋

いよく世の乱を發。一。遠島。一。奉り。天下泰平の基を聞。計り。奏
 聞よ。べき。是の。政道を。妨。必定謀叛の。味。速。ゆ。衣
 して。此由を。奏聞よ。企を。止。奉。た。久。捕。獄。入。
 や。言語。同。藤房郷。優。緩。奏。返。
 の。天子。御謀叛の。企。何。一。其。身。意。を。得。と。り。八。林。奈
 高時怒。御謀叛の。御企を。あ。ぬ。て。お。ま。ぎ。し。兵。舌。振。進。と。の
 ると。の。其。下。の。御目的。他。の。鎌倉將軍。并。執權。北。奈。や
 と。云。終。藤房郷。怒。の。色。を。天子。御謀叛。の。と。恐。れ。さ。き
 中。奈。の。神慮。を。叛。き。謀。手。の。御謀叛。と。云。べき。鎌倉將軍。執權。北。奈
 など。善。長。天子。を。蔑。其。罪。を。亂。さ。ん。と。是。を。御謀叛。と。稱。
 公家。官。を。召。捕。雜。人の。如。し。天位。を。傾。け。の。企。神罰。免。と。の。よ。警。へ。武。威

さして一旦の勝利と獲りとも。おんご子孫の後采らんとや。北条家の滅亡を招く
似たり。是非を論せむ。天位を傾と思ふ。先藤房をきりて。席を遣ふ。其理
明白なるよめて。流石の高時と関口と。門三千八百六十人。一人として詞を發
せらる者なく。廣々たる席中。何れも頭を垂れ。眼を閉ま。あつて。遂にしごとくせ
秋田城之。秋時頭進み出て。御理解のなむむき畏り。高時をとりて。一統口を閉て罷
在り。此六仰下さる。一をよむ。今日。御旅館へ御下され度。何れ日。日の理。さび
奉んと願ひ。藤房親曰く。然。三入の禁獄を。速く免を。一と。空を。立て。あづく
として。放歸ふ。かへり。高時やうく頭を。あけて。曰。藤房。身古を。振ひ。當前の理を。解
と。本意。不。わ。り。助。け。置。後。日。の。妨。げ。彼。等。帝。へ。進。め。奉。り。鎌。倉。を。と。き。んと
企。ふ。余。悪。き。振。舞。ひ。あり。此。六。是。非。を。論。せ。む。兵。を。は。の。見。藤。房。の。首。を
き。つ。く。北。条。家。の。災。を。除。ん。速。く。其。用。意。せ。よ。と。蔵。一。下。知。を。傳。へ。ら。ん。バ。礼。を。も

儀。も。し。て。ま。ま。ぬ。猪。武。士。た。高。時。子。諂。す。下。知。を。あ。つ。の。の。専。と。み。手。配。り。を。使
り。り。秋。田。時。頭。大。い。小。教。馬。高。時。を。諫。て。曰。く。武。威。を。も。て。公。家。を。討。つ。と。は。や。せ。け
れ。朝。敵。の。名。を。得。り。と。き。ハ。背。き。て。隨。ふ。者。な。り。され。バ。北。条。家。の。滅。亡。を。招。く。如。し
速。く。三。綱。を。免。都。よ。あ。り。ま。へ。永。く。鎌。倉。を。止。ま。置。違。勅。の。罪。免。れ。が。く。北。条。の
家。名。の。穢。れ。猶。豫。を。ら。る。に。何。と。と。強。く。諫。え。ら。る。ゆ。へ。高。時。も。是。非。を。あ。つ。ま。其。意。を
ま。の。せ。三。綱。を。免。藤。房。等。と。も。都。へ。か。り。の。一。り。る。あ。つ。る。々。三。綱。と。も。都。よ
あ。り。直。に。参。内。し。て。鎌。倉。の。不。礼。言。語。不。絶。た。る。よ。微。細。を。奏。聞。お。よ。び。お。よ。び。帝。い。よ。く
逆。鱗。つ。よ。く。高。時。を。と。き。んと。密。に。催。し。あ。ひ。り。る。北。条。高。時。ハ。秋。田。時。頭。の。強。諫。よ。あ。つ
く。藤。房。親。を。と。り。久。三。綱。を。免。し。の。一。と。い。へ。ど。も。猶。怒。り。を。止。ま。さ。ず。大。軍。を。發。都。よ
推。登。り。帝。を。遠。嶋。小。辻。奉。ん。と。關。東。八。羽。の。勢。兵。を。催。促。お。よ。び。り。る。秋。田。城。之。み
時。頭。今。諫。ふ。た。よ。り。なく。北。条。家。の。滅。亡。遠。く。ざ。ら。せ。察。し。鎌。倉。を。退。去。し。て

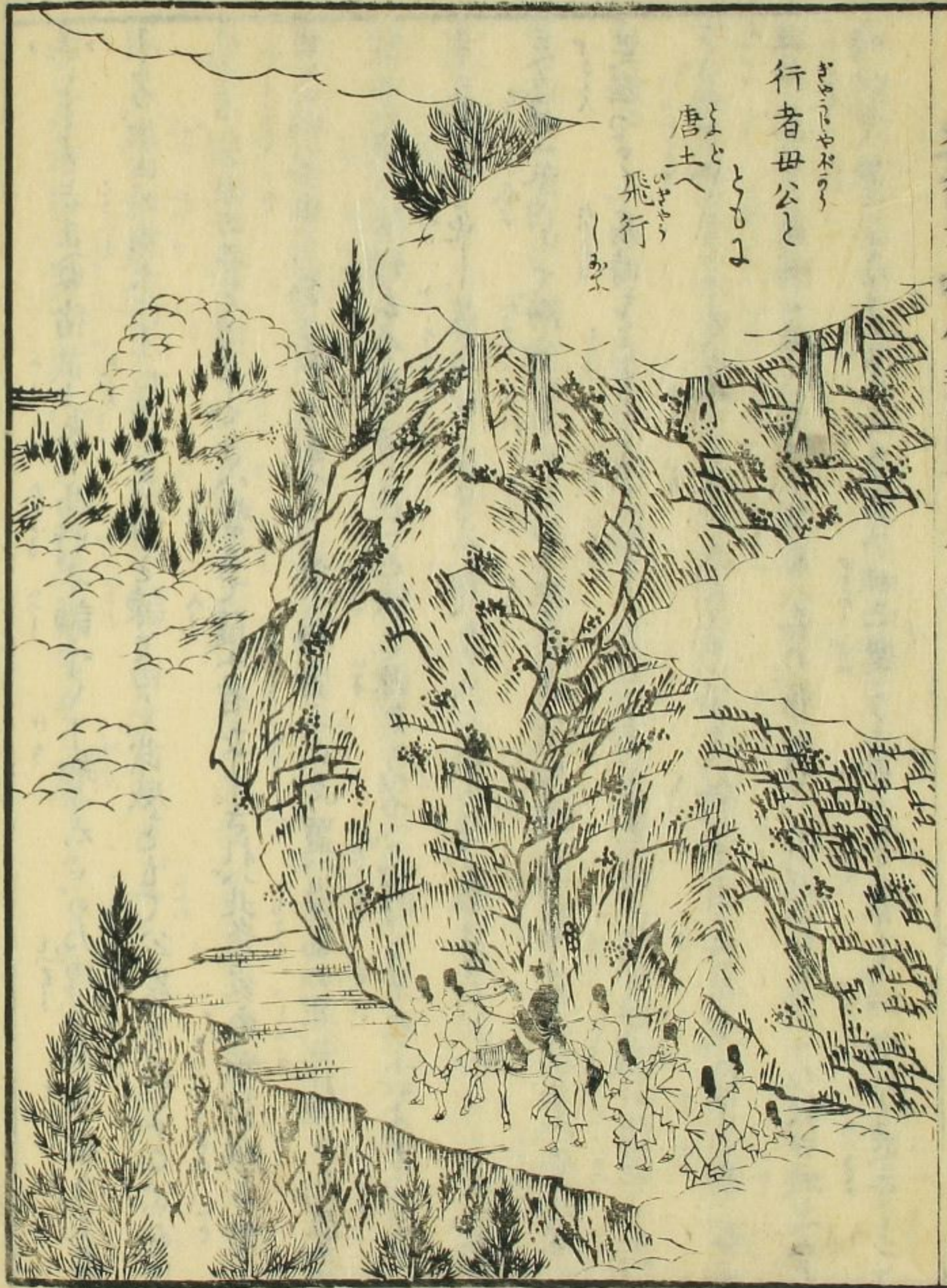


行者母公と

唐土へ

飛行

いざやう
しあふ



勢如朝熊岳の麓朝熊村築松庵とへる。禪庵小塾居一。天下の治乱を窺ひ終つひ此庵このいんにて没せしむ。則山内小塚河。猶遺物として。太刀たが、天國寺てんごくじ小納久せうなひさ。差添さそへ、同村之住橋本助左衛門子讓しやうじやう。秘法ひひつの地藥ちやくあり。是、野間因幡のまゐなといへる者もの子傳しやうでん。是を諸人助しよじんすけの為ためとして賣藥ばいやくとして。朝熊岳あそぶたけの万金丹まんだんと号なづ。却詭鎌倉せきやう、秋田時頭あきたときだう退去たいその後のち、佞臣等時べいじんとうじと得えて。高時たかとき子諂しやうぜん。眼前がんぜんの賤理せんりと論ろん。後難こうなんをありし。高時たかとき愚おろして天野あまのを顧かへりむ。專軍勢せんぐんせいをそりへ。不日ふじつして京都きやうとへ推奇おしきの千配せんばいりをなす。此こゝ都みやこへ聞きへん。帝みかどやまのしららにお不しめ。急いそぎに都みやこを生御なまみあり。南都なんとの方かたへ行幸ぎやう。此こゝ地ちも御心ごこころのなままにお時とき山城やましろ國くに笠置かさし山やま六む要害やまかひ堅固けんこの岩窟いんくわよりは。奏聞そうもん。小勢せうせい子こて、鎌倉かまくらの大軍たいぐんを防事ぼふじからしと。獻慮けんりょを悩む。亦また、時とき奏そうし奉ほうりらる

ハ河内國かみのくに小楠せうなん正成せいせいといふ者ものあり。文武ぶぶ小章せうしやう。正直しやうじき子こて常つねに北条きたじやう高時たかときの武威ぶゐを惡にく河内かみのくに赤坂あかざかといふ所ところに居いる。方卒かたそつハ得易えきく一將いっしやうハ難得なんとくといへる。古語こご子こ習しゆひ此者こゝのを召まよせしむ。彩幣さいへいをとりて勢せいあらむ。招まねて軍勢ぐんせいハ集あはれる。依よ之の万里まにり小路せうり藤房とうぼう。勅命てふめいとなり。笠置かさしの老僧らうそうを引導ひんどう者ものとして。河内かみのくに赤坂あかざか子こ行ゆく。正成せいせい小對面せうたいめん。勅命てふめいの布ぬしむまを演まりて楠なん正成せいせい謹きんでうけたまりらる。藤房とうぼう々々隨したがひて笠置かさしの皇居みやうきよ子こ至いたる。則すなはちち奏聞そうもんする。獻感けんかん不斜ふしゃ三座さんざ近ちかく召奇まへたまひ。逆賊ぎやくたく北条きたじやう高時たかときと謀戮ぼうりやくをまきて旨勅命しよてふめいとなり。正成せいせい謹きんでう今度こんど鎌倉かまくらの大軍たいぐんハ必かなずに武相ぶさうの勢せいあるべ。日本にっぽん六十むそ余あまりの勢せいとなり。推奇おしきのとも。武藏むさし相模さうもの兩國ふたくに勢せいあり。あらりがしといふが然しかれども。北条きたじやう高時たかとき者もの長ながし。たらばはむむくまやさし。志こゝろのしもあらず軍法ぐんぽう子こ進退しんたいのかけひきありしものならば一旦いつたんの勝負しやうぶハ御覽ごらんありしべしとも。正成せいせい存命ぞんめい仕しへる聖軍せいぐんひてのせまりしとも。奏そうししけん。帝みかど深ふかくようくひまひに急いそぎに其手配そのてくばありしともの勢せいあり

楠正成畏て河内赤坂をかへり籠城せし時鎌倉の軍勢大に陸奥守を大将として
 大名六十三人惣勢二十六万七千六百余人と聞たり。京都六波羅に常盤駿何
 守三万余人をもつて鎌倉の大軍をかへりし。笠置の皇居へ推しよる。鎌倉
 が河内赤坂をかへりし。此時楠家の籠城敵五百余人あり。常盤駿何守ハ
 三万余騎をもつげま。帝を隠岐國へ遷し奉り楠家ハ奇計をめぐらし赤坂城
 を逃れり。鎌倉勢も走りどきとていども再び大軍攻發りと聞へり。同國千破
 矢に籠城せし其勢總八百余人あり。鎌倉勢八万余とまこへけり。志のれども種々
 の智畧をめぐらし防戦不奇計をく敵を腦を不思議の良將なり。依之よせての
 大軍攻發りて遠きよりなり。楠家はていも屋をるるをく。間者をはのあ
 自由子諸方へ通達し。龍居をこし。怠りもあつらる。奇午の諸將ハたつらも
 よつて詩哥連誂甚双六或ハ酒安ふよし多あり。然るハ大塔官ハ高野山の眞子

在く赤松律師則祐を命し。赤松圓心ハ奇計をさげけり。則祐直に播磨へ急ぎ行
 て父圓心對面し。大塔官の令命を傳ふ。圓心歸時ハ一門の兵を集めて軍配を定めて
 京都六波羅を攻り。急ぎ。常盤駿何守驚て鎌倉へ訴。高時急ぎ下知を傳
 遣キの勢と差向る。然るハ京都に近くちつて。其勢の中より。足利高氏軍軍
 屬ハ赤松圓心の力をたす。六波羅を攻む。北条左近將監時益同。越後守仲時等
 終に戦死せし。餘ハ散々もあつて逃行し。降人ともなり。依之千破矢城の
 圍も忽ち解たり。是より楠赤松力を合せ帝を迎へ奉る。守護し奉る
 名和伯耆守長年ハ帝を迎へ奉り。伯耆國松上山に皇居をくらし。守護し奉る
 依之隱岐判官清高。佐々木彈正左衛門昌繩馳む。のう戦といへども。長年の軍配
 依之。昌繩ハ戦死せし。清高ハ逃れ去りぬ。依之逆キ者なく。長年帝を守護し
 やせし。松上山を出。都へ還幸を定め奉り。此より國々より。都へ往進をこれより

後行 者往傳記圖會卷之十

三十一

て楠足利赤松づれも播磨までへゆく。迎奉り元弘三年六月廿日都へ還幸あり。この時
 新田義貞北条高時とて。將軍守邦親王ハ鶴と函子あわす。剃髮及保衣の
 身となる。又道一もよ。注進を依之帝御心やさしく不しぬ。あひら。此時
 大塔宮護良親王。還俗一あまよる。征夷大將軍を任し。あひ。天下の政事を主
 とりあまよる。泰平の御世とたまりらる。然るに足利高氏ハ征夷大將軍を
 望とへども。大塔宮其任し。あまよる。我望の空しくたなり。何とぞて宮
 とを退んと。種々の悪計を企けり。今帝はく體愛し。あま。准后ハ大塔宮と。其中
 不和なるよ。是を聞て高氏幸ひの事おもひ。准后子誦ひく。大塔宮子。御謀叛
 の企て有之よ。謗言子をのびり。帝ハ准后子。御愛情ふるも。也へ。謗まよひて
 罪なき。大塔宮も高氏の牙。左兵衛尉直義へ預けり。よ。聞へら。万里小路中
 納言藤房御楠正成太子。驚急ぎ。諫奏し奉り。とへども。准后御側し。在て

妨り也。忠諫も用ひたまへ。終に左兵衛尉直義らぶ。のりて。鎌倉へかくり。八
 幡号。再い。世の乱る。を悲みて。楠正成。遺言して。都を逃れ。山中へ入
 て。再び。たまへ。捕。世の乱る。と知とへども。武士の道世。戦場を死と信く
 せんもの。を。此時より。戦死の心を決せ。と。あま。御説。左兵衛尉直義。大塔宮を
 土牢へ入置けり。北条家の。歿。遺。旗を。あま。聞へら。高氏。勅命。を。家
 鎌倉へ。馳む。の。直義。と力を。合。北条の。類。を。亡。猶。謀。て。岡。伊。賀。と。公
 者。ヤ。言。多。大塔宮を。殺害し。北条の。類。忍。ひ。へ。害。せ。と。あ。聞。て。相
 准后子。誦ひ。けり。然れども。天。討。免。れ。が。く。終。露。頭。ま。か。よ。追。討。の。軍。勢
 を。さ。さ。し。む。け。ら。高氏。朝。敵。と。なり。公。易。の。軍。勢。を。催。促。して。都。へ。還。り。あ。ま。を
 せ。ら。ら。る。其。勢。八。万。余。と。聞。へ。ら。也。都。へ。專。防。戦。の。も。配。り。猶。准。后
 の。口。へ。ま。よ。る。新田。義。貞。と。大。將。と。一。楠。正。成。を。副。將。と。一。あ。ま。あ。の。れ。ども

楠偏執の心さうにまゝ義貞の力を合せ奇計とめらう。八十余の大軍を
 數度の戦ひなまゝ。終つて足利兄弟を西國へ追下し直つて討たせしむ。所轄
 人馬の息を休ん為都下を合戦の始末と奏聞をよぶ。義貞は楠の武畧
 にかよさるゝ。種々の賄賂を運び詭計を准后へ唯敬せしむ。くわいせいの
 ちりこひ。何のこまもへもまゝ。今度楠の戦功を新田に告ぐ。奏し。依之新田義
 貞を左中将に任じ。楠は何のさしよもよまを猶其人准后のものをいひ
 て今當の内侍も。義貞に賜ふ。義貞は内侍の艱難なるをよび。出陣の心算に
 楠正成出陣をいそぎ。新田への催促再三かよぶ。病有と偽りて對面
 せしむ。かのさうりら。是は容易のしむ。近討延引をかよぶ。智謀ありき。足利兄弟
 不日大軍を發し。攻めかへ。さればや。しき大事なり。と。急ぎ参内して。今度足
 利兄弟と西國へ追下せしむ。と。捨置が近き。大軍を發し。攻めかへ。速く追

討の勢を差むけむ。大乱の基なり。新田義貞病あり。出陣せしむ。正
 成は大将の命を賜ふ。馳せよ。一戦をかよび足利兄弟の首をと見ん。と。正成の
 謀略あり。と。出陣せしむ。奉り然り。防門侍忠参議先經は。義貞より。かへく
 賄賂せしむ。けし者。今義貞虚病あり。と。正成の願を妨げ。奏聞
 にかよぶ。依之空しく。陣所をかへり。佞臣殿上。在て。さしよ。げをよ。め。力
 へも。足利兄弟攻めし。速く討死して。帝の御夢をさま。奉ん。か。あ。む。を
 新田義貞合戦より。ち。ま。た。足利の世とあらん。其時帝を。一。奉。り。へ。き。地。を
 見立置ん。と。吉野山に登り。皇居の地を定めん。と。後行者。祈り。又。時。忽
 行者出現し。ひ。女。が。誠。志。を。憐。み。今。皇。居。の。地。を。さ。づ。く。り。あり。是。ま。く。は。你。ま
 因縁あり。女が父楠正成。年。十。歳。か。あ。ひ。て。子。を。言。ふ。を。歎。き。何。勿。志。貴。山
 に登り。畏。後。天。王。を。祈。り。て。授。け。り。八。女。を。志。貴。山。に。安。置。せ。り。畏。後。天。王

我前生子守屋退治の時勝軍本として自作り鬼の中ふかさ免勝利を
 得し尊像入て靈験つしむる。此因縁より皇居の地を教へ早く未
 と先立峨々たる嶮山に登り多し行者前生の御本楠正成行者の御後志しむるの
 登りけん。行者ハ賀谷生といへり可なりて告曰く此所を要害の地と定め置
 百万の大軍攻奇なりし。登りてみれば必しも是に違ふものなりとて直ちに
 虚空を踏んこ山上ヶ嶮のうへとびさり多し。楠正成奇異のふもひをば。行者
 の御心とてをわし。其地を見らふ嶮岨の山頂より平地あり。まじ霊水まんくと
 して不思議の地地なり。此所を縄張りて皇居の地を定めしめ。それより都へ
 馳登りし。尔時遠察みとてこゝに違ふ。足利兄弟ハ西國勢七十余の大軍
 まで攻登りよ。住進櫓の齒を挽がかり依之殿上係し周章し。新田義貞ハ楯
 及兵庫へ出張も。楠正成楯ヲ櫻井の宿まで正行吉野皇居の地也。行者の告

外に深く微細に教へ恩智左近太郎備一より合せ皇居をせし奉り。二十歳不
 なるまで彩幣を満す預け。のちのちを軍事を母に説きべのりむと。豊吉言て
 總七百人を去り。又楯加藤川へ出陣あり。正行ハ七千六百余人をひきて。何れ赤坂へ帰
 ひそか皇居のやりの専ら。正成七百人をもて。七十万の大軍あり。三日の戦ふ度
 勝利を得るといふも。いとより覚悟のしなれど。静みさあぐ酒宴を催し。至後六十三人
 自言て。赤芝此名を懼し。多和漢まらんなる良將なり。足利高氏大軍をたげは。新
 田義貞を遣散し。都に乱し。東寺を本陣として。光嚴天皇を帝と仰ぎ。後醍醐天皇
 也。花山の古宮を推護。越智伊賀守を番主とす。此花山の古宮に。八ヶ流宮あり。さながら
 ら配所の如し。中勢居唯不御側。さむらひの哀れあり。然るに正行父の遺言を堅く守り
 吉野に皇居を設け。恩智満王と使として。越智伊賀守を解て。官軍を召寄せしめ。楠家の勇
 士四人。建武三年十月十日の雪の夜古宮に志のび。越智を力と合せ。竊に吉野へ下り奉り

吉水院寶成院の両寺を皇居として守護し奉り然るも足利高氏大軍を差むけ何勿
 四糸繩手不戦楠正行此戰場に討死を依之足利勢ハ高野に推奇り帝ハ賀名生土籠
 りもふ也よせての大軍近見り小嶮岨なるも眼を教馬をのりて攻登るべきたより
 依之人馬の息を休め再びよまらんふ以前に倍して岨々として高く登るべき
 道なり是道違へりなりと馳廻り猶々人馬の道路絶たり高野越後守師崇
 高野武藏守師直烈一々下知を傳へ數万の軍兵一度に攻登りて此時依小白雪
 起て山の腰を遠く敵ささるる雲中みなが如く惣勢不幾天を仰ひくひの入り依之
 力かよを退きてより再び敵もる者なくやとくと皇居を定めり是偏り役行者
 の御威徳なりとて後醍醐天皇勅を下し多くの櫻を植させたり藏王権現への午向と
 し一帯羊々繁茂して十本の櫻となり此も亦権現の御愛樹と成り入るとり
 役行者御傳記圖會卷之下終

跋

友人東海子混跡於市信以舌耕為業
 而其講說忠臣烈婦高僧道士傳其禪
 生履歷以至于行住卧坐喜怒哀位之
 快于態萬貌如快江河遺諸傳使兒女
 童蒙輩或笑或樂或怖或憾雖親接其
 人目擊其事亦不可得如斯之詳密精
 細而其意終歸於勸懲而後止而已矣
 斯書之作固書價之所請特其誕味唾

餘不終數日而成者雖固非其本也亦
足以推其才思矣而後行者靈驗奇特
神變不測之說言々白白有真實有方
便筆隨其所說言混々涌出者真可謂
為作矣或曰奇則奇是亦何為而作之
嗚呼亦欲教信心道信勸善懲惡至誠
無私者猶其平素所講說云志承己酉
二月甲子辱知生保田碩苗跋於生玉
白水堂

皇漢洋今古書類自家積年發見之者其集
藏帝二充棟載車、夥々々々々々品位精工價
程清廣以テ四方君子、愛顧ヲ待也

文榮堂藏版

東區南又賢寺町四丁目十九番屋敷

阪府書林 前川善兵衛

早稲田大学図書館

011488555202